

間の基本的な営為である言語活動は文化的営為である。互いの言語の尊重は、互いの文化の尊重でもある。韓国で、つたない韓国語を少しでも話すと、韓国の人々はすぐ  
 (「Uri・Marul・Charyashineyo」=「私たちの言葉がお上手ですね」)と言ってくれる。異なる文化間での人と人との交流そして相互理解は、このようところからはじまるのではないだろうか。ちなみに、21世紀は多言語・多文化の時代と言われている。



成せば成る！ 数学の河田賢二先生と市場のおばさん：河田先生は、訪韓前の1ヶ月間に韓国語入門書付属のCDを100回以上聞いて勉強し、現地では韓国語でコミュニケーション。

## 私の外国語学習について

現代中国学部  
服部 健治

私は一応中国語と英語がしゃべれる。“一応”といったのは、何とか相手と意思が通じ合え、こちらの意図すること、つまり仕事や研究事業の目的を、これまた何とか達成できるということであ

り、人に披露できるほどの実力はない。もっと恥ずかしいことは、大学時代に中国語、英語以外にドイツ語1年、フランス語と朝鮮語は2年、ロシア語はプーシキンの詩を聞くまで3年もやったが元の木阿弥である。どれも何一つ実を結んでいない。

だだ、英語学習でプラスであったのは、米国の大学院留学のとき、毎週英語でペーパーを書かされたこと、2年間アメリカの白人家庭にホームステイしたことである。ラリー、ドニー、シェリーの兄、弟、妹は今どうしているのだろうか。中国語のマスターでは、大学で中国語を専攻したが、やはり前職の財団法人日中経済協会の仕事で通算10年間、北京に駐在したことが幸運であった。

とはいっても、私の中国語は英語と同じで実践の中で覚えたので中途半端、本来ならここで紹介するのもおこがましいと思っている。多くの中国の友人は私の中国語を聞いて、おせじと気を悪くしてはいけないと思い、「講得好（上手ですね）」と言ってくれる。私の本心は上手とはいっこうに思っていないので、いつも聞き流している。それとは別に、きまってこのように答えている。「我的中文、基本上没有问题、但是实际上有问题」（私の中国語は基本的に問題ないが、実際上は問題あり）と。要するに、外国語はできるか、できないかしかないものであり、ちょっとできるなどではできない部類に入る。そう考えると、私の中国語も「できない」部類に入るのである。外国語マスターは趣味やアクセサリーでないので甘く見てはいけない。畢竟到達点はない。

その実、私の女房に「私の外国語マスターについて書いて欲しいと頼まれている」といったら、あなたの外国語マスターはいいかげんだから読んだ人が誤った考えをもつので、絶対書かないほうがいいと嘲笑し、苦言を呈する。

ちなみに私の妻は華僑である。今は日本国籍を取り、2児の母であるが、生まれはシンガポール、育ちはジャカルタ、北京で高校時代を過ごし、中国全土に極左路線が吹きまわった文化大革命の終わりごろに広東省の農村に下放した。その後、香

港で事業をしていた彼女のお父さんの尽力で中国大陸を脱出し、香港で1年間英語を勉強した後、アメリカの大学に留学した。米国留学中に私と知り合い、大学卒業のあと結婚のため日本に来了。波乱万丈、有為転変の人生といえる。

その結果、北京語はもとより両親のふるさとの言葉である閩南語（福建省南部の方言、台湾語と同じ）、下放の成果として広東語、半分母国語であるインドネシア語、その兄弟語であるマレーシア語、そして英語、日本語と7つの言葉を操る。そんな言葉上のタレントである愚妻が私の外国語をバカにするのだから、私の実力もたかが知れている。多くの華僑が多種の言葉をしゃべれるのは彼らの人生そのものだから仕方ない。私と比較されたら困るが、それでもあえて書くのは、私は私なりのやり方で勉強したからである。

外国語のマスターの第一はまず日本語をよくしゃべることである。日本語で話す内容を持たないのに、どうして外国語までうまくなれるだろうか。語学学校にいくら行っても、何かしゃべろうとする話題や自分なりの見識、判断、知識を持っていないと、上達することはない。はっきりいって無口な人はまず外国語はうまくならない。日本語でもしゃべらない人が、いきなり外国語でむちゃくちゃしゃべれるなんてありえない。ジキル博士とハイド氏なら別であるが。

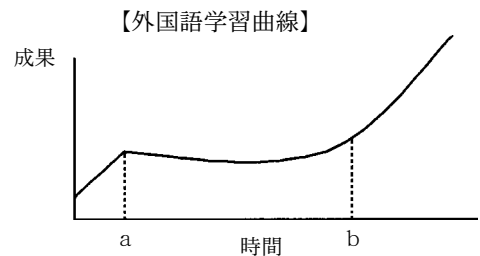
第二にアウトプットからインプットを考えること。具体的にいうと、自分がある場所である問題についてスピーチすると想定して、それを外国語でどのように言うのか考えて練習することである。圧力、強制をかけるのである。外国人が聞いていると想像して、こういった言い方、表現は外国語でどのようにいうのかをまず考えること。いきなりがむしゃらに単語を覚えても意味がない。自分の仕事や勉強に関係する、興味のある事象からまず単語をマスターしていく。身に付くきっかけは興味である。

第3は聞く力 (hearing) をつけること。聞く力を100とすると、しゃべる力は半分である。聴いて分らないのに、どうしてしゃべれるのか。勉強

の方法はまず毎日テープを聞いて書き取る、dictation（中国語では听写という）の練習が肝要である。目で見て分かってもしゃべれない。赤ちゃんの学習過程と同じである。一種の単純肉体労働である。

第4は口慣らしの読む練習である。朗読ともお経を唱えるとも言える。同じ教科書を3回読むまで使うことが大切である。文章を暗記しようなどと欲を出さず、ひたすら毎日10分ぐらいずつ読み進むこと。教材は今の自分のレベルより一つ下のレベルの本を使うと良い。高校の教科書を音読するためにもう3度使用してみたらどうか。注意すべきことは、ぶ厚い教材を使用しないこと。薄いのだと早く終りマスターした気分ひたれる。偉そうに言っている私も大学の教授になって以来、忙しさにかまけてやっていないのが実情であるが。

第5は、「継続は力なり」。外国語のマスターのプロセスは図のような右上がりの放物線を描く。aからbまでの時間帯はいくら勉強しても成果が見えず、いらいらしていやになる。この期間にギブアップする人が多い。その苦しい時期が過ぎると、急に成果が見えてくる。そこまで辛抱できるかどうか、外国語マスターの分岐点である。これをもって柔道、剣道、茶道、華道等に倣い「外国語道」と言う。



私の人生を振り返って、やはり英語と中国語をやっていて良かったと感じる。特に中国語を勉強したおかげで、中国関係に接し就職においても、思索においても、研究においても私の人生を豊かにしてくれた。若い諸君が中国語を勉強して決して悔いはないであろう。ましてや21世紀は中国が

台頭し、注目されるからである。

最後に外国語ができることは、頭の良し悪しに関係ないと肝に命じるべきで、できなくても悲観する必要はない。ただ、外国語をマスターすると世界が広がり、知識が深まる。そして、マスターした人は、そうでない人と比べて、新しいモノへの好奇心が強く活動的、未知への興味が強く理知的、我慢強さの「3強」を兼ね備えていると見られるだろう。

## 外国語の勉強は「話すこと」から

現代中国学部  
劉 柏林

言語には口語と書面語という二つの形がある。口語は書面語の基礎でもあり、人類のコミュニケーションの重要な手段でもある。日常生活では口語が書面語よりよく使われ、人間社会に欠かせないものである。しかし、外国語を勉強する人は口語より書面語に力を入れる人が多い。なぜかというと言語は口語より発音の正確さが要求されないし、作文を書く時にゆっくり考えながら書けばよいからである。それに、教育機関では外国語の実力評価は筆記試験で評価することが多い。それで書面語を重視し、口語を軽視するという現象が表れたのである。これはもちろん外国語教育の基本方針と教育者の教え方にも関わっていることである。

私はよく学生に「どの国の言葉がやさしいですか」、「中国語は本当にむずかしいね」と言われるたびに「母国語の以外の言葉はみな難しいですよ、みなさんにとっての中国語ももちろんのこと

です。難しくなければ、大学に入って勉強する必要はないのではないですか」と答えている。確かに外国語は容易に身につくものではなく、時間をかけて勉強しなければ、上達するものではない。中国では外国語教育の基本は「聞く、話す、読む、書く、訳す」ことである。外国語をマスターするには良い環境（客観的要素）と自分自身の努力（主観的要素）が必要である。むしろ、後者のほうが重要であると言えよう。中国語には「有志者事竟成」（志さえあれば必ず成功する）という諺があるが、私は外国語を勉強する過程において、これを痛感している。志と自信がなければ、語学に限らず、他の事もマスターできない。「習っている外国語を必ず身に付けるという意志を持つことが大事だと思う。

私は外国語を勉強する以上、発音は勿論のこと、会話をきちんとやらなければならないと思う。外国語を習得する際、聞くことと話すことは最も基本である。一般的に自分の勉強している外国語が正しく聞き取れるなら、その言葉の発音を真似することができ、文章も一応読めるのである。これらは相互補完の関係にある。中国語を母国語とする人が日本語を習う場合として、日本語を母国語とする人が中国語を習う場合も、最初に正しく練習することが大変大事である。最初の発音をしっかりマスターしておかないと、後々勉強に支障が出てくる。始めに覚えた変な発音はあとから直そうとしても、一度ついてしまった癖はなかなか直らない。だから、発音の基礎を固めることは外国語学習の第一歩である。初心者にとって、日本語の「長音」「濁音」「促音」「拗長音」はわりあい難しいと思う。中国語の標準語にはそういう音素がないからである。中国の四川、湖南、陝西、福建省など長江沿岸地域出身の人は始めのうち、日本語の「な」と「ら」がうまく区別できない人が多く、ずいぶん苦勞する。これはその地域の発音の特徴が影響しているようだ。私の体験からいうと日本語を習いだして最初の一ヶ月間は、先生やネイティブスピーカーの模範的な発音テープを繰り返し聞きながら、その発音を何回も